

III. 家庭の雰囲気にとけこもう

家庭のリーダーの信頼を得る 家庭のリーダーとは、世帯主あるいは家長という意味ではない。明るい家庭、にぎやかな家庭、なんとなく固く、らしい家庭など家庭にもいろいろあるが、その雰囲気をつくりあげている中心人物、それがリーダーである。世帯主が社長であろうと、家庭では奥さんというリーダーに動かされていることもある。

将を射んと欲すれば馬を射よのたとえのとおり、未熟児指導を行うときも、その家庭のリーダーを早くみつけ、調子を合せてゆくことは、指導効果をあげる最短距離のように思われる。たとえば迷信を信じ昔風な育児の方法を最良としている祖母であっても、その人がリーダーである場合は、その祖母と親しくして指導したほうが、祖母を無視して母親に指導するよりは効果的である。リーダーと親しくすることによって、その信頼を得さえすれば、リーダーの考え方を是正することは、比較的困難でなくなるばかりでなく、未熟児を包むその家庭の雰囲気をも変えられないでもない。

指導者とかみしもはぬぎすてよう 家庭の雰囲気にとけこむとき、もっとも邪魔になるのは指導者という肩書きである。指導者然とした言葉や態度をとっていたのでは、雰囲気にとけこむどころか、水の中の油のように浮き上がってしまい、せっかくの指導も聞きながされてしまいかねない。

その家庭が八百屋であればそのように、八百屋の組合からでも派遣されたような気もちで接することが大切である。言葉にしても工員のおかみさんに対するのと、何々マンショ

ンに住む母親に対するのでは自然ちがわねばならない。いつも相手中心にして、自分自身をなじませる努力は、家庭の雰囲気にとけこむためには必要欠くべからざるもののようである。

IV. 指導範囲をみきわめよう

環境上 いろいろの指導要綱などをみると、部屋は南向きで陽あたりよく、風通しの良い静かな所など

をこらして、最初の訪問時とは見違えるような環境にしてくれる、工夫ママもある。

児の発育に応じて 未熟児の発育は一つの段階をこえると、急速に発育し、生後半年以内に成熟児なみになる例が多いように思われる。従って母親の育児方法が多少原則からはずれていても、児の発育が良ければ無理になおさせる必要はない。

こんな例があった。

未熟児 家庭訪問指導のかんどころ (2)

日本赤十字社本部産院保健指導室々長

青 木 康 子

と記されているが、実際には理想的な部屋に未熟児がおかれている家庭は少い。都会などでは、四畳半1間に台所などという家庭はざらにあり、日光のまるで入らない家庭があるかと思えば、西日がひどくあたり扇風機をかけないとむし風呂のようになってしまう家もある。

その家庭を訪問したら児にふれる前に手を洗うことは常識であるが、その手洗いをできるだけ台所で行うようにし、その時を利用して、住宅の状況を観察し、指導できる範囲あるいはどの程度まで原則をずらさなければならぬかをみきわめる必要がある。

母親たちからそっぽをむかれるのは、とかく画一的な指導、つまり実際の生活をつめないで、原則だけをおしつける場合に多い。しかしここで注意したいことは、できそうもないからとあきらめる前に、理想に近づくため、母親や家族といっしょに工夫してみることも必要である。可愛い子供のため、つぎつぎと工夫

父親が結核の回復期、子供は年子で4人目、生活保護を受けている。

1間に家族6人で環境もあまりよくない上、母親はある宗教に入っており、あまり几帳面でない。訪問したところ、ミルクを買う代金がなくなり、窮余の策で、生後2か月の未熟児に重湯に卵黄と人參汁、砂糖を入れたもの1日4～5回、トマト汁1日2回与えるという変則的な栄養法を行っていた。しかし児の発育は良く、1日の体重増加は80g 顔色も良く便も変りなかった。

このような場合、それをやめさせることよりも、もしミルクが手に入ったとき、急に全面的にミルクに変えないような指導のほうが大切である。要するに、どうしてもやめて貰わなければならないこと、できればやめて欲しいこと、そのままつづけても差支えないことというような目安を考え、その定規を児の発育に応じ、環境に応じて臨機応変につかい

わけることである。 (つづく)